

日本温泉科学会大会第53回大会

特別講演

消費のまち・こんぴら

香川大学教育学部
武重雅文

Konpira : The Town of Consumer Culture

Masafumi TAKESHIGE
Faculty of Education, Kagawa University

Abstract

Kotohira is a religious town built in Edo era. Now, this town is famous for hundreds of stone steps to Konpira shrine on the mountain and an old Kabuki theater “Kanamaruza” built in Edo era. This town has been developed by not only religious culture but consumer culture. One of the important element made this town famous is a novel “Konpira Douchu Hizakurige” written by Ikku Juppensya, a famous popular writer in Edo era. I would consider the relationship between tourism (monomiyusan in Japanese culture) and advertisement, or copy culture, referring using this novel as an example. And last of all, I would present a characteristic hot spring culture in Japan.

キーワード：消費社会，観光旅行(物見遊山)，広告，温泉文化

Key Words : Consumer Society, Tourism (monomiyusan), Advertisement, Hot spring culture

1. はじめに

弥次喜多道中といえは、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』。この物語を知らない人は、ほとんどいまい。言わずと知れた江戸時代の滑稽小説である。江戸は神田八丁堀の裏長屋に住む職人の弥次郎兵衛と居候喜多八という凸凹コンビが繰り広げる珍道中。あまりにも有名な物語である。しかし、この小説が観光名所の宣伝広告にもなっていたことはあまり知られていない。

弥次喜多が伊勢参りを思いついたのは、享和二年というから1802年のことである。むろん彼らは架空の人物であるが、『東海道中膝栗毛』がベストセラーになった後、読者の要望に応え全国を旅することになる。さしずめ「フーテンの寅さん」の江戸版ということになるろうか。弥次喜多の旅は、享和、文化、文政の二十一年間もつづき、彼らはとうとう江戸には戻らなかった。

この間、弥次喜多は全国各地を巡りめぐる。伊勢、京、大坂、安芸の宮島、善光寺、草津温泉。彼らの旅は観光旅行であったのである。そして彼らは、四国こんぴらにも足を伸ばしている。という

より、『東海道中膝栗毛』につづく続編は、「東海道中」の終点であった大坂からの『金比羅道中膝栗毛』(十返舎, 1810)であった。こんぴら参りは、伊勢参りとならぶ当時の観光コースであり、こんぴらが全国有数の観光地であったことがここにも表れている。

ところで、弥次喜多道中が好評を博したのには理由がある。グルメやツアーが関心事になっている現代と同様、文化文政期は大衆(町人)の文化が花開き、観光旅行(物見遊山)も町人の関心事になっていた。ことに江戸や大坂という大都市の町人にその傾向が強く、観光小説へのニーズは高まっていた。そして、これを受け観光地の宣伝も盛んに行われ始めていた。一九をはじめ著名な作家による宣伝コピーも出回る。少し前の「寅さん」の誘致運動と同様の宣伝行為も行われていた。現代文化ときわめて似た文化が、この時代に姿を見せ始めていたのである。こうした現代文化との類似点は、江戸後期においてすでに消費社会化が進展し始めていたことを示している。この報告では、『金比羅道中膝栗毛』を一つの題材にして、消費社会という観点から門前町こんぴらの特徴を描き出そう。

2. 門前町の発達と『名所図絵』に見るこんぴら

こんぴら信仰の起こりは、あまりはっきりしていない。史料から読み解く限りでは、元龜4(1573)年の金比羅宝殿の棟札から始まるという(松原, 1987)。そこでは、「上棟象頭山松尾寺金比羅王赤如神宝宝殿、当時別当金光院権少僧宥雅造営」と書かれており、表に造営、裏には建立とあることから、象頭山松尾寺の境内に金比羅堂が建立されたと解される。つまり、金比羅は松尾寺の守護神として祭られたと思われる。しかし、その後慶長年間には松尾寺の名は消え、金比羅別当金光院という名が一般化する。理由は定かでないが、金比羅は松尾寺から独立した寺格をもつわけである。

以降、讃岐の領主となる生駒家や松平家から加護を受け寺社も、また門前町もしだいに骨格を整えていく。元和元(1622)年には、生駒家から330石の寄進を受け、後を襲った松平家の薦めの結果慶安元(1648)年には金比羅領330石の安堵とともに、朱印地とすることが認められた。さらに宝暦3(1753)年には勅願所に、同10(1760)年には日本一社に、そして安永8(1779)年には幕府祈願所になることが許可され、幕府、朝廷の権威で守られる寺社となった。

それにつれ、門前町も賑わいを増す。すでに慶長6(1601)年生駒家は他国からの門前への移住を自由化していたが、その後寺格の上昇とともに参詣者も増え、門前には様々な店が軒を並べていく。元禄末(1703)年に描かれた岩佐清信の「象頭山祭礼図屏風」には町並みとそこを行き来する人々が鮮やかに描かれている。図1はそれから少し下った享保年間(1722年頃)に描かれたと思われる絵地図であるが、ここにも門前の中心である五百丁市(後の内町)ははじめ街道沿いに発展する門前町の様子が窺えよう。

門前町の発展をさらに促進したのは、江戸時代中期以降盛んになる物見遊山客の存在である。寺社参りと温泉湯治には関所も寛大であったため、富士講、大山講、伊勢講など様々な参詣集団が街道を往来するようになる。伊勢参りは、下級神官であった御師達がガイド役を行うことで日本の代表的な物見遊山コースになった(神崎, 1991)。それに負けず金比羅講も人気を博し、参詣者は全国的規模になっていく。讃岐出身の大坂の船宿経営者多田屋新右衛門は延享元(1744)年金比羅参詣船の願いを金光院に出し許可された。多田屋はこんぴら門前の内町宿屋虎屋兵次郎と提携し、大坂から金比羅参詣を行う浪速講の定宿として虎屋を指定旅館とする。こうして出来上がった回船、船宿、こんぴらの旅籠の提携という、いわばパッケージツアー化は、伊勢参りにはないこんぴら参詣の特徴になった。そして18世紀末の寛政年間には、大和屋弥三郎、平野屋佐吉などの大坂の業者も参入し、参詣者をさらに増やすとともに、図2(松原, 1981)に見られるような大きな旅籠が軒をならべる門前

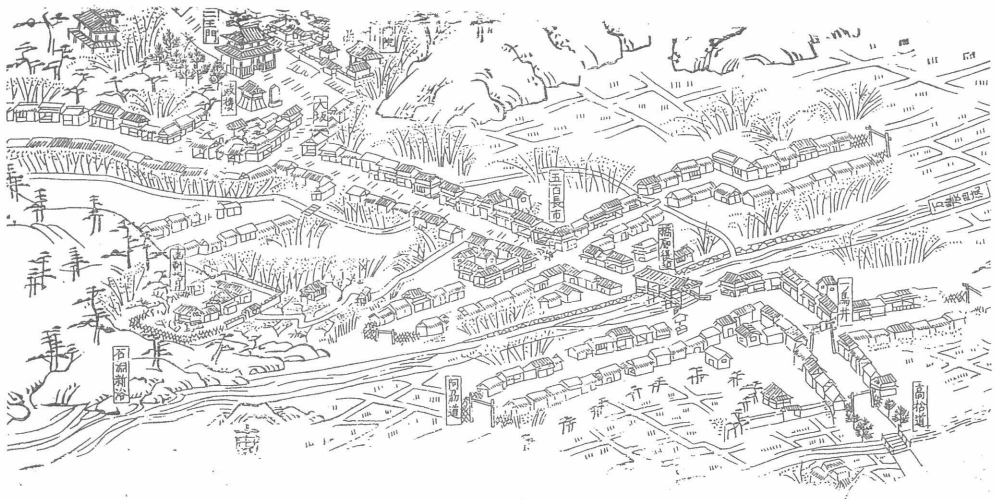


図1 讃州象頭山金比羅神社図（「町史ことひら」第5巻絵図・写真編，1995年）

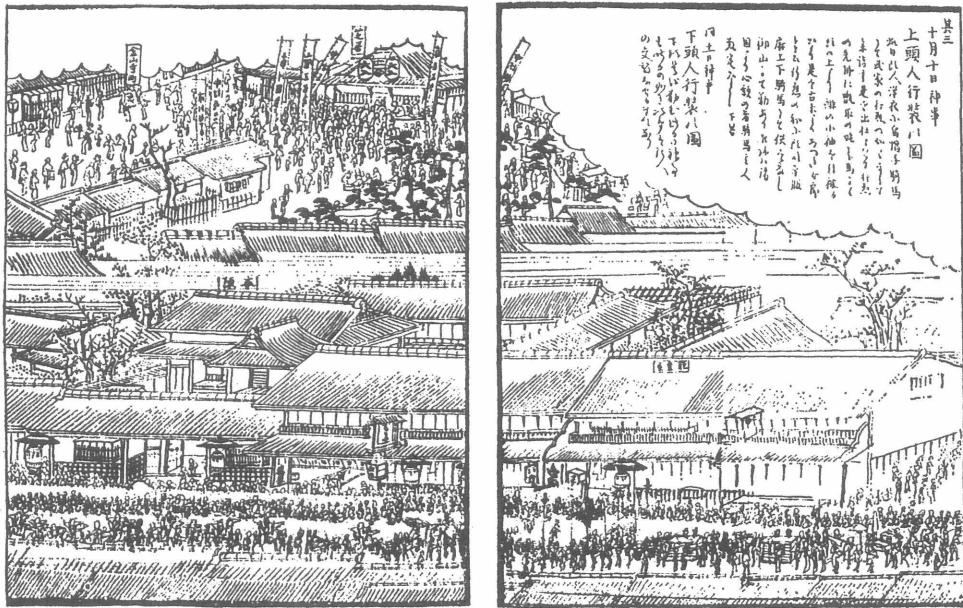


図2 十月十日神事，上頭人行装の図（松原，1981）

町へと内町界限は変わっていく。

参詣客の増大による門前町の変容は、内町の旅籠に限らない。名産品の飴や菓を売る土産物屋、参詣客の遊興心を誘う茶屋、芝居小屋、富籤場もこびら門前町の相貌に加わっていく。年3回興行していた芝居の仮小屋は、天保6(1835)年には金比羅大芝居という常設劇場となり、文政8(1825)年から始まった富籤は大芝居完成後その劇場で行われることになった(図2の左上に描かれているのがその大芝居劇場である)。さらに、客を誘う遊女を置く茶屋も目立つようになる。文政7(1824)年の金光院の調べでは、大芝居がある金山寺町を中心に80軒もの茶屋があったという。当時の門前町人口の1割以上が、こうした遊女達であったということになろう(松原, 1990)。

3. 『金比羅道中膝栗毛』をテキストにして

さて、十返舎一九はこの町に弥次喜多を登場させた。もっとも、後で記述するように弥次喜多のこんぴらは、あまりに淡泊である。その前に、彼らの道中記に触れておこう。

弥次喜多の道中は、東海道中の終着点であった大坂長町から始まる。彼らは、予定通り江戸へ帰るつもりであったが、同宿の野州人五太平に誘われて金比羅参りに出かけることになる。そして道頓堀の大黒屋で丸亀船宿という行灯をみて、船に乗り込む。船は、兵庫沖を通り、淡路島を横手に見ながら丸亀を目指す。船内では、讃岐人と思われる船頭、野州人の五太平、江戸っ子の弥次喜多の軽妙な会話が行われていた。しかし、この頃から海は荒れだし、船酔いで五太平は死んでしまう。一行はやつとのことで夜半に停泊地室津に到着した。室津は当時繁華な港町であり、遊女のいる町でもあった。弥次喜多は、ここで五太平を寺に葬り遊女とたわいのない話をして、翌々日丸亀へ向かう。小豆島や牛窓、下津井を見ながら船は丸亀に着き、大物屋という旅籠に入る。船頭の宅でもあった、この旅籠で1泊。翌朝丸亀・こんぴら街道を歩いてこんぴらに到着するのだが、その道案内も件の船頭が勤めている。そしていよいよこんぴらの入り口にある唐銅の鳥居をくぐって、門前町に入る。そこでの描写はつぎの通りである。

「此所をたちいで、五六丁ゆけばこんぴらの町にいたる、丸亀より是まで三里なり、まちのなかほどにさやばしというはしあり、上にやかたありていとめずらしきはしなり、

上を覆う屋形のさやにおさまれる御代の刀のような反橋

是より権現の宮山の昇、麓より二三町ばかりのほどは、商家たちつづきて、地黄煎薬飴を売る家多し、弥次郎その商人の白髪なるを見て

うる人の白髪大根はちとさし合いか地黄煎見世

やがて仁王門に入り十五六町の坂をのぼりて御本社にいたるに、その荘厳いと尊く、拝殿は捨皮葺にしていかめしく花麗殊にいわんかたなし、先広前に額突奉りて、

十露盤に達せし人も神徳のおもさはしれぬ象頭山かな

此御山より海上の島々浦々郷々一望の中に見わたされて、風景いうも更なり、かくて下向の道をいそぐに、接待所神馬堂のあたりより、あとになり先になりて、石段をおりたつものは、年の頃廿二三歳と見え……」(十返舎, 1810)

こんぴらの描写は、これだけである。後は、いつものようにこの女性とおぼしき人物の後をつけ、善通寺、弥谷寺を参詣し、弥谷寺近くの宿屋でこの人物に悪さをしようとしたが、実は大坂の男役者であったことに驚き、翌朝多度津で下駄屋に歯をぬかれ、丸亀の大物屋に到着するところで物語は終わる。

一九の金比羅道中は、こんぴら門前町の賑わいを全くと言っていいほど描写していない。描かれたのは、金比羅参詣の絵図でよく知られた名所、名物、弥次喜多と出会った様々な国出身の人々との軽妙な会話である。弥次喜多が興味を示したであろう茶屋の遊女も、大芝居も、富籤もそこには描かれていない。どうやら何か理由がありそうである。

4. 一九の嘘・こんぴらのウソ

一九は『金比羅道中膝栗毛』初編の序で、本編を刊行するに際しては版元の膝栗毛の続編を書けという勧めに抗しきれず、昔高知に行く途中立ち寄った金比羅周辺を舞台にして書く羽目になったと記している。版元は、なおも弥次喜多が江戸に帰着するまで続編を続けよ、といっているという。

『東海道中膝栗毛』がベストセラーになったことから、出版社に是非にも続編をとせがまれた人気作家の言い訳ともいえそうな記述である。

しかし、金比羅道中の淡泊さはそれのみではないようである。守屋毅によれば、弥次喜多の金比羅道中の立ち寄り先は、この本が出版される4年前に刊行されていた菱屋平七の『筑紫紀行』と全く同一の所である。そればかりか、船上からの風景描写や挿し絵まで同じものが使われているという。名古屋の商人菱屋平七は大坂から金比羅、宮島をへて長崎にいった旅を紀行文として残していた。守屋(1987)は、平七と一九の二つの作品を照応すれば『金比羅道中』が剽窃であると言わざるを得ないという。この説には説得力がある。『金比羅道中』の続編として刊行されたのは、なんと『宮島道中膝栗毛』なのである。そして、この本の序でも一九はまた「大坂に帰るはずの船が難破し、宮島にたどり着いた」という苦しい言い訳を記している。

さらに驚くような指摘もある。柴田昭二によれば、安永4(1775)年日本で初めて出版された本格的な方言辞典『物類称呼』に記された各地の方言が、ほぼそのまま『膝栗毛』の会話に登場しているという。柴田は、『筑紫紀行』と『物類称呼』の二書を机辺において、一九は行かずして『金比羅道中』を書いたのではないかという(柴田, 1991)。今はなき人の行為を検証する方途はない。しかし、当時著名なコピーライターであった一九の存在を考えれば、こうした仮説も成り立つであろう。

しかし、一九の作品がどのようにして作られたにせよ、こんぴらは『膝栗毛』によってさらに有名になり、参詣客を増やした。土産物の地黄煎菓飴も、『東海道中膝栗毛』に登場した安倍川餅や丸子のとろろ汁ほどではないにしろ、名物になった。金比羅参詣者の多くが、弥次喜多道中を頭に描きながら金比羅周辺の物見遊山を楽しんだであろう。そして、こんぴらの町もそのことを十分に知った上で、観光客誘致に励んだはずである。いずれにしろ、こうした作品がガイドブックになり、江戸後期の観光旅行が人々を誘ったことは間違いあるまい。

5. むすびにかえて：観光から考える温泉文化

消費社会とはウソ(イメージ)の社会である。しかし、同時に遊びの社会でもある。つまりはフィクションと戯れる社会といえよう。フィクションと知りつつそれとつきあえるのは、したたかな大人である。消費のまちは、そうした町に他ならない。そして消費社会の遊びの一形態が観光旅行である。それを内容のないコピー体験ということもできる。しかし、観光旅行の中にも真実や新しい発見はありうる。非日常の世界を体験するために人は旅立つのであるならば、日常の垢を落としに出かける観光旅行も旅の一つではあろう。

江戸時代から日本人は湯治という名目をもって、温泉へも物見遊山に出かけていた(神崎, 1991)。草津温泉を一九が『膝栗毛』の一つに加えたのも、当地が観光地であったからであろう。日本人が温泉好きな一因も、江戸時代中期以降観光地化した温泉地の魅力にあらう。科学的には湯治にならない温泉観光旅行にも、非日常の「ハレ」を体験する可能性はある。温泉文化の研究にも消費社会的切り口を加えることができるのではないか。今回の報告が、そのための刺激になれば幸である。

文 献

- 十返舎一九(1810)：金比羅参詣続膝栗毛初編(上)(下)，帝国書院，東京，1894年，引用文はp.501-502。
 神崎宣武(1991)：物見遊山と日本人，講談社，東京，p.135-181。
 松原秀明編(1985)：町史ことひら，第5巻絵図・写真編，琴平町，p.33。

松原秀明編(1981)：日本名所風俗図絵14 四国の巻，角川書店，東京，p.470.

松原秀明(1987)：天正前後の象頭山—松尾寺から金比羅金光院へ—，守屋毅編，金比羅信仰，雄山閣，東京，p.73-80.

松原秀明(1990)：金比羅信仰の歴史的展開，悠久，第44号，p.6.

守屋毅(1987)：金比羅信仰と金比羅参詣をめぐる覚書，守屋毅編，金比羅信仰，雄山閣，東京，p.203-205.

柴田昭二(1991)：道のことは—金比羅参詣続膝栗毛 初編—，四国地区国立大学放送公開講座，道の文化，美巧社，高松，p.116.

(日本温泉科学会第53回大会で発表，平成12年8月26日)